

指導活用技術
分類名〔病害虫〕

指 11	クモヘリカメムシの分布域の拡大と防除対策
------	----------------------

宮城県古川農業試験場

要約

大型の斑点米カメムシ類の一種であるクモヘリカメムシが、宮城県南部だけでなく、これまで発生が想定されていなかった県北部でも発生し、分布域が拡大している。クモヘリカメムシに対する防除対策としては、従来推奨されてきた穂揃期とその7～10日後の薬剤散布が有効である。

〔 普及対象：水稲栽培を行う土地利用型経営体
普及想定地域：県内全域 〕

1 取り上げた理由

クモヘリカメムシは本県の斑点米カメムシ主要種であるアカスジカスミカメより大型で、登熟初期の加害はしいなや不稔粒を、登熟中期以降の加害は斑点米を発生させるため、多発した場合に被害が増大する恐れがある。太平洋側におけるクモヘリカメムシの生息北限は本県南部とされていたが、温暖化の影響による分布拡大が懸念されていた。そこで、県南・県北地域でフェロモントラップによる発生実態調査を行った。令和2年度の調査においては、石巻市・登米市・気仙沼市・南三陸町でクモヘリカメムシの発生を確認した（普及に移す技術96号）。さらに、令和3年度の調査において、これまで発生が確認されなかった地域で新たに発生を確認したので、指導活用技術とする。

2 指導活用技術

- (1) クモヘリカメムシは、仙台市沿岸及び、厳寒期の気温から発生の可能性が低いと想定されていた（92号参考資料17）県北部の内陸部（大崎市・栗原市）に分布域を拡大している（図1）。
- (2) クモヘリカメムシ多発ほ場における特徴として、水田内に越冬世代成虫が侵入した後に幼虫の発生が見られ、8月下旬～9月中旬に第1世代成虫が発生する（図2左図）。
- (3) クモヘリカメムシ対策としては、従来推奨されてきた穂揃期とその約7日後の2回防除を行うことで、幼虫の発生密度を抑制し、斑点米被害のリスクを低減することができる（図2左図、右図）。

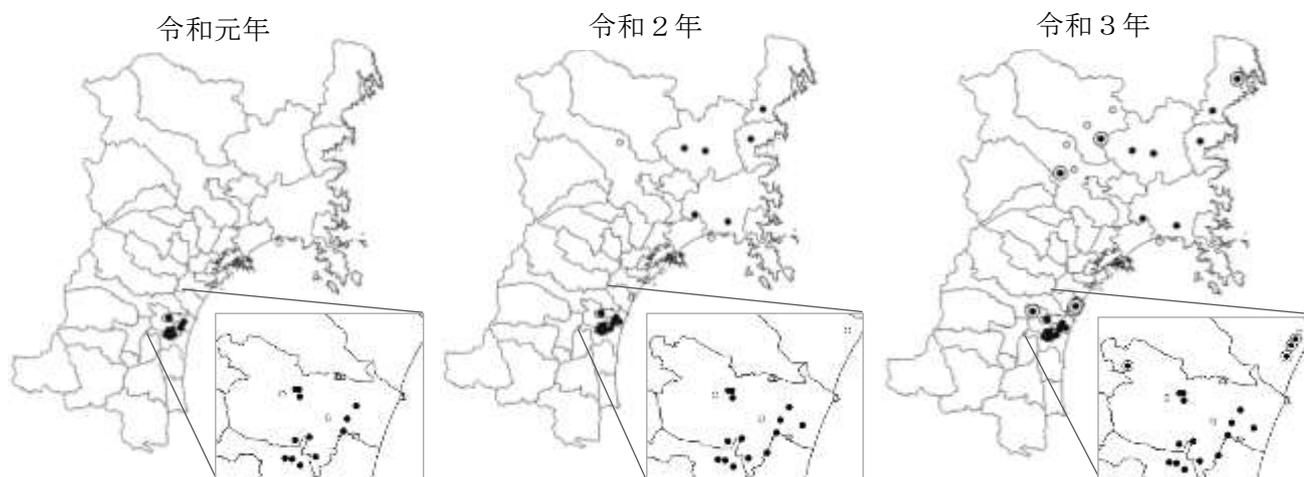


図1 フェロモントラップ設置地点と捕獲が確認された地点（令和元年～3年）

注）令和元年，2年，3年時点で捕獲が確認された地点を黒（令和3年に新たに確認された地点は二重丸），確認されなかった地点を白で示す。

3 利活用の留意点

(1) クモヘリカメムシの分布調査は、フェロモントラップを畦畔際の水田内等に設置して行った。

調査期間 令和元年7月中旬～9月中旬, 令和2年7月上旬～9月中旬, 令和3年7月上旬～9月中旬

調査地点数 令和元年：県南部 15 地点, 令和2年：県南部 15 地点, 県北部 7 地点, 令和3年：県南部 4 地点, 県北部 12 地点

(2) 薬剤防除は穂揃期とその7～10日後の2回防除が基本であり, 2回目の散布以降も発生が見られる場合は追加防除の実施が望ましい。

(問い合わせ先：宮城県古川農業試験場 作物環境部 電話 0229-26-5107)

4 背景となった主要な試験研究の概要

(1) 試験研究課題名及び研究期間

クモヘリカメムシの分布域の実態把握とモニタリング体制の整備 (令和元年～令和3年度)

クモヘリカメムシ発生水田における防除体系の確立 (令和3年度)

(2) 参考データ

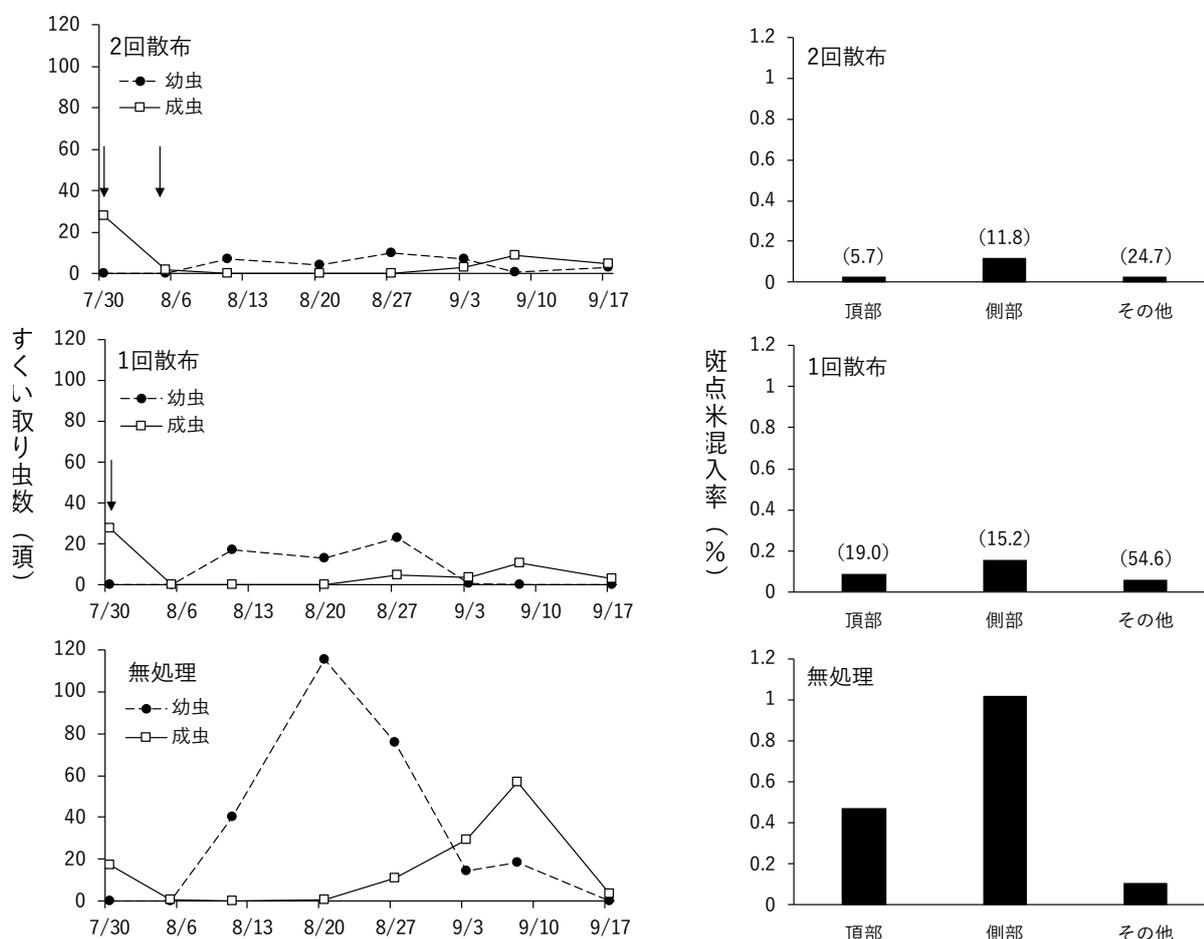


図2 クモヘリカメムシ多発ほ場における薬剤散布による防除効果

注1) 左図は各試験区の20回振りすくい取り調査結果, 右図は各試験区の斑点米調査結果を示す。

注2) 2回散布：穂揃期(7/30) + 6日後(8/5)に散布, 1回散布：穂揃期(7/30)に散布。

左図中の矢印は散布時期を示す。

注3) 7/30の2回散布区と1回散布区のすくい取り虫数のみ, 両区内を調査した虫数の平均値とした。

注4) 右図中の()内の数字は対無処理比を示す。

注5) 斑点米は, クモヘリカメムシによる被害粒と判断されるものを計数した。

（3）発表論文等

イ 関連する普及に移す技術

（イ）クモヘリカメムシの発生生態（第92号参考資料）

（ロ）クモヘリカメムシの推定生息域（第92号参考資料）

（ハ）クモヘリカメムシ（斑点米カメムシ類）の分布域の拡大（第96号指導活用技術）

ロ その他

川端泉穂・小野亨・横堀亜弥（2020），宮城県南部におけるクモヘリカメムシの発生実態調査，北日本病害虫研究会報第71号，p 205

（4）共同研究機関

なし